慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	杉浦章介著『都市経済論』
Sub Title	
Author	瀬古, 美喜(Seko, Miki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2004
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.96, No.4 (2004. 1) ,p.659(197)- 660(198)
JaLC DOI	10.14991/001.20040101-0197
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20040101-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」96巻４号（2004年１月）

書　評

杉浦章介　著

『都市経済論』

岩波書店，2003年，226頁

本書は，都市経済をめぐる現状についてその基本動向を明らかにし，都市経済を体系的に捉えるための枠組みを提示することを目的とした，これから経済学を学ぼうとする初学年の学生や，総合教養教育の一環として都市の課題や経済の問題を学ぼうという学生を対象とした入門書である。

本書は全３部からなっている。まず，第Ⅰ部では，都市経済を産業集積という観点から捉えて，都市経済が産業革命以降どのようにして生産力を増大させ，多くの労働人口を養い，拡大と発展をしてきたか，また，現在，都市の生産システムはどのような仕組みへ移行しようとしているのかを，取り上げている。第Ⅱ部では，都市経済を，空間的に組織された，ひとつのまとまりを持ったシステムであるという観点から捉えて，都市の内部分化のプロセス，都市システムの特性，都市システムのダイナミックな変化，都市のグローバル化と都市経済の問題を，取り上げている。第Ⅲ部では，都市経済を広義の社会共通資本という概念でみることによって，それが，どのように形成され，利用され，将来に手渡されてゆくのかを，明らかにしている。

目次を紹介すると，はしがき，第１章　都市化と都市経済，第Ⅰ部　産業集積としての都市経済：第２章　大量生産システムと都市経済，第３章　集積の利益と外部性，第４章　技術革新と集積の自生的展開，第５章　国際分業と分散ネットワーク型集積，第Ⅱ部　空間的システムとしての都市経済：第６章　都市経済の空間的内部分化，第７章　中心性と都市システム，第８章　都市システムの形成と変容―アメリカ合衆国の事例研究，第９章　越境する都市システム，第Ⅲ部　社会的共通資本としての都市経済：第10章　社会的共通資本と経済活動，第11章　都市の経済成長と社会的共通資本，第12章　外部不経済とゼロ・エミッション都市経済，第13章　都市経済における土地と住宅，第14章　さらに都市経済を学ぶために，である。

まず第１章から，より詳しく見ていく。第１章では，本書では，主として産業革命以降に発展してきた現代の産業都市について焦点をあてるということ，都市経済論の課題は，技術革新，人的資本，グローバル化，地球環境といった現代社会の基本動向を，いかにして，具体的な都市の営みや，都市問題の中で捉えることができるかということにかかっているということが，強調されている。

次に，第Ⅰ部の各章の内容を簡単に紹介する。

第２章では，産業革命以降の生産力の飛躍的な増大が，分業という生産組織の革新と新しい機械の導入ばかりではなく，集積の利益という外部性や，分業の深化や専門化から生まれる生産組織や技術革新の自主的展開の結果であるということを，アメリカ合衆国の自動車王ヘンリー・フォードの作り上げた生産の仕組みを例として取り上げて，説明している。さらに，このような大量生産のシステムが，産業都市の発展や拡大のメカニズムについても説明してくれるということを，都市経済の「ロック・イン効果」という観点で検討している。なお「ロック・イン効果」とは，都市経済の自己増殖的な拡大のループが形成されることを，意味している。

第３章では，工業立地要因として，輸送費，労働費，集積の利益の三つを取り上げ，それらに基づいた立地論を，まず紹介している。次に，マーシャルの外部性と集積の問題を取り上げ，労働市場における労働力のプール，下請専業化と分業の深化による高品質で相対的に安価な中間財の生産，技術的波及効果の三点が，集積をもたらす外部性

であるというクルーグマンのマーシャルの外部性に関する要約を紹介している。さらに，空間的集中と産業集積の問題を区別する指標として，アン・マークセンらの分析指標を紹介している。

第４章では，マーシャルの「技術革新の波及効果」の考え方を拡大して，革新（イノベーションズ）に関する問題を取り上げて，産業集積や都市経済の自主的かつ持続的な発展のメカニズムをあきらかにしている。

第５章では，海外との経済活動とそれにともなう都市経済の変容というグローバル化が果たしている産業集積の再編と，都市経済の変容へのインパクトを分析している。

次に，第Ⅱ部の各章の内容を簡単に紹介する。

第６章では，都市経済を動かしている生産活動と消費活動が，どのようにひとつの都市の中で展開しているのかという空間的内部化の問題を扱っている。

第７章では，都市を構成要素とする都市システムにおいて，さまざまな規模の都市やその数はどのように決定され，その結果，どのような空間的な配置を示すようになるかという問題を，中心地モデルを用いて，検討している。

第８章では，国のレベルにおける都市システムの形成と変容を，アメリカ合衆国の長期間にわたるマクロの事例研究を取り上げて，分析している。

第９章では，ミクロレベルでの大都市圏の外延的拡大現象とエッジ・シティ（edge cities）の勃興と，マクロレベルでの国境を越える経済活動のネットワークの形成とグローバル・シティ（global cities）の興隆の問題を取り上げている。

次に，第Ⅲ部の各章の内容を簡単に紹介する。

第10章では，道路や鉄道，電話回線やエネルギー供給ライン，法制度や学校教育制度といった生産に間接的に貢献する社会的共通資本（Social Overhead Capital）という概念で，都市経済を取り上げている。

第11章では，都市経済の成長と社会的共通資本との関わりについて分析している。

第12章では，都市経済の成長がもたらしている負の外部経済性の問題（たとえば廃棄物の処理問題や環境破壊など）を，社会共通資本の観点から，検討している。

第13章では，都市経済における土地と住宅の問題を，需要供給両サイドから検討し，さらに，持ち家政策や，ホームレスに関する事例研究を，扱っている。

最後に14章では，市場，空間，システム，社会的公正，デザインの五つの観点から，本書全体を通しての，現在の都市経済を考える視点を，まとめている。

このように，本書は，都市経済論の学際的な側面を前面に押し出した，非常に幅広いトピックスを網羅した，都市・地域問題全般に興味のある大学生向きのバランスの取れた入門レベルの良書である。また，入門書ではあるが，巻末に丁寧な専門的な文献ガイド・文献リストが掲載されており，本論でも最先端の研究トピックスも取り上げられているため，入門レベルよりも進んだ読者にとっても，参考になるものと考えられる。筆者も最初に述べているように，書名は『都市経済論』であるが，本書を読むために，経済学の予備知識は必要とされていない。なお，本書を読んだ感想では，一般的に『都市経済論』という書名から想像されるよりも，はるかに幅広いテーマが取り上げられているため，書名と本書の内容が若干食い違うような印象を受けた。本書の特徴である学際性を強調するような書名なり，副題なりがあった方が，本書の良さが，もっと出たのではないだろうか。その点が若干残念な気がするが，これまで類書がない，都市・地域経済をめぐる現状全般に関して，その基本的な動向が明確に把握でき，都市・地域経済問題をどのような枠組みで捉えるべきかということに関する指針を与えてくれる優れた入門書であり，一読に値する書であると考える。

瀬　古　美　喜
（経済学部教授）